

## T.S.エリオットの中期の詩における脱円環を志向するイメージ

古賀, 元章  
福岡教育大学 : 名誉教授

<https://doi.org/10.15017/1654287>

---

出版情報 : Comparatio. 19, pp.18-33, 2015-12-28. 九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会  
バージョン :  
権利関係 :

## T. S. エリオットの中期の詩における脱円環を志向するイメージ

古賀元章

はじめに

T. S. エリオット (Thomas Stearns Eliot, 1888–1965) の中期の詩は、語り手たちが人間社会から逃れようとする場面を描写している。このような描写の詩風は、初期の詩が強調する円環のイメージ (都会生活の退廃や倦怠の繰り返し、そうした退廃や倦怠の歴史的過去からの繰り返し)<sup>1</sup>からの脱却の希求である。この希求がわれわれ読者に、脱円環を志向するイメージを印象づける。

ここでは、三つの項目 (1925 年の詩、1927 年以降の詩、1930 年の二つの詩) に分けて、中期の詩に表現された内容を検討する。1925 年の詩は、空しい日常生活の呪縛から解放された別の世界を願っている。1927 年以降の詩は、同年にエリオットが英国国教会へ入信したことと呼応して、この宗教に基づく語り手たちの精神的再生の祈願を前面に押し出している。1930 年の二つの詩は、この祈願を今少し強調して展開させている。

では、中期の詩において上述した脱円環を志向するイメージがどのように描かれているであろうか。また、そこからどのような特徴が明らかになるであろうか。本稿ではこれらの点を論述したい。

### 1. 1925 年の詩

T. S. エリオットにおける最初の主要な中期の詩は「うつろな人々」(“The Hollow Men”, 1925) である。この詩にはエピグラフが記されている。それは、「ガイ爺さんに 1 ペニーやってくれ」(“A penny for the Old Guy” 83<sup>2</sup>) である。「ガイ爺さん」はガイ・フォークス (Guy Fawkes, 1570–1606) である。カトリック教徒の迫害に復讐するため、彼は仲間たちと一緒に、国会議事堂を火薬で爆破しようとした。しかし、この企てが事前に発覚し、貯蔵所の火薬を見張っていた彼は 1605 年 11 月 5 日に逮捕され、翌年に死亡した。この火薬陰謀事件に因んで、イギリスでは毎年 11 月 5 日にガイ・フォークス祭が行われて、彼の人形が夜に焼かれる。同日、花火を打ち上げるお金を集めるため、子供たちは「ガイの奴に 1 ペニーやってくれ」(“A penny for the Guy”) と叫び、ガイを擬した人形を町中で引き回す (Southam 209)。エリオットの詩のエピグラフは、子供たちの言葉を借用している。

そうした背景に着目して、この詩の第一部の冒頭に目を向けてみよう。

We are the hollow men  
We are the stuffed men  
Leaning together

Headpiece filled with straw.” (1-4)<sup>3</sup>

俺たちはうつろな人間  
俺たちは詰め物をされる人間  
互いにもたれながら  
頭部は藁だらけ。ああ！

反対の関係にあるイメージが示されている。それは、生気のない衰れた人間の姿と、生きる喜びを見出せないでいる自分を嘲笑する人間の姿である。

こうした二重描写を理解するため、この詩のエピグラフに注目してみると、供たちの言葉であることに注目すると、「俺たちは」(“We”)の惨めな姿は志半ばにして死んだガイを連想させるし、この言葉の滑稽な姿は古着の中に紙や藁やぼろ切れを詰められた彼を連想させる。

このような人物描写の二面性を理解するとき参考になるのが、エリオットの評論「太鼓を叩くこと」(“The Beating of a Dram”, 1923)である。そこでは、未開人や原始人の芸術には、後世の作品に見られる悲劇的な要素と喜劇的な要素がはっきり分かれていない、と彼は述べている。その芸術の一例として、未開人の叩く太鼓が取り上げられている。未開人が太鼓を叩くのは、彼がそうしかつたからである。彼の行為に客観的な理由づけをすることができない。後世の人々が彼の行為に合理的な解釈をした結果、悲劇や喜劇の作品が生れることとなる(12)。

そうした考えがあったため、エリオットは後世の作品の源である未開人や原始人の芸術の特徴に新たな詩的表現の可能性を求め、その可能性が1925年の詩の悲喜劇的な人物描写に反映されているのである。

その後に表示されている内容は次の通りである。

**Shape without form, shade without colour,  
Paralysed force, gesture without motion; (11-12)**

形のない姿、色のない陰  
麻痺した力、動きのない身振り。

これら2行は、形だけの顔、明暗だけの姿、本来の活発な働きがなくなった他人まかせの身振りを描いている。姿と形の記述は、ガイを真似て作られた人形を思い起こさせる。

未開人や原始人の芸術に関する見解に基づいて、エリオットは「うつろな人々」の人物の二面性を描いていた。この点に留意すれば、エリオットが言及する彼らの別の芸術を看過できないであろう。それはトーテム崇拝である。このトーテム崇拝に注意を払って、ガイの人形をわれわれに執拗に印象づけさせようとする背景を考察する。

1916年、エリオットはデュルケームの『宗教生活の原初形態』(*Les Formes élémentaires de la vie religieuse*, 1912)の英訳本 *The Elementary Forms of the Religious Life* を書評する。彼はこの書評の中で、トーテム崇拜をこう論述する。未開人であれ文明人であれ、人間は、孤独に耐え切れないので、個人の意識を超えた別の意識に慰安を求めることによって、生きる力を養い、維持する必要がある。未開人にとって、別の意識とは集団トーテムと一心同体となることである(“Durhkem” 14)。ここで注目されるのは、未開人と文明人に共通した心理作用が述べられていることである。この共通点が、未開人と文明人のわれわれにも当てはまる。ガイの人形とわれわれとのつながりは、未開人とトーテムとのつながりに似ている。ガイの人形が、われわれにとって一種のトーテムである。

「うつろな人々」の11-12行に続く詩行は次のような場面である。

**Those who have crossed  
With direct eyes, to death's other Kingdom**

**Remember us—if at all—not as lost  
Violent souls, but only  
As the hollow men  
The stuffed men. (13-18)**

一途な目で、死の別の王国へ  
行った人たちよ

覚えていただきたい—もし覚えて下されば—われわれを死んだ  
激しい魂としてではなく、  
うつろな人間  
詰め物をされる人間として。

ガイ一味が起こした火薬陰謀事件と関連づけて、この場面を考えてみる。彼らは、前述したように、仲間のカトリック教徒たちが圧迫される法律の実施を中止させようとした。その試みを成功させようとした野望に燃えるガイ一味の目が真剣であったと想像される。「一途な目」(“direct eyes”)は、そうした野望に燃えるガイ一味の目ではなく、世の中の真実を見ようとする人たちの目である。そこで「人々」(“Those”)は、死後に天国へ行った聖者たちを指している。「死んだ / 激しい魂」(“lost / Violent souls”)は、謀反人として処刑されたガイ一味に言及している。語り手は、われわれが謀反人のガイを醜く摸した主体性のない人形と同じ仲間であることを暗に指摘している。この指摘は、われわれが営む日常生活の世界を風刺する。語り手は、天国の聖者たちへの祈りを通して、日常生活の束縛から解放された別の

世界を求める。

この詩の第二部から第四部で語り手はわれわれに、二つの世界（われわれの日常の世界、それとは違う別の世界）を語りかけている。この日常の世界が次のように述べられている。

**Eyes I dare not meet in dreams  
In death's dream kingdom (19-20)**

死の夢の王国では  
私が夢でも敢えて会わない目

**The eyes are not here  
There are not here  
In this valley of dying stars  
In this hollow valley (52-55)**

目はここにはない  
目はここには存在しない  
消えかけている星のこの谷には  
このうつろな谷には

19 行目の「目」(“Eyes”)は、14 行目の「一途な目」を指している。13-14 行は、日常の世界から解放された別の世界を願う語り手の姿を思い起こさせた。また、19-20 行と 52-55 行は、われわれの日常生活が死のような世界なので、そうした別の世界が期待できない事実を示唆している。54 行の「消えかけている星」(“dying stars”)は完全に消えていない星である。この行と「このうつろな谷」(“this hollow valley”)は、光が十分に差し込むわけでもないし、全くの暗闇でもない谷間である。これらの語句は、われわれの日常生活の現実がまるで薄明かりに包まれた状態で、活気のない索漠としたものであることを伝えている。

その後、語り手はわれわれが日常生活の束縛から解放された世界を次のように示している。

**There, the eyes are  
Sunlight on a broken column (22-23)**

そこでは、目は  
壊れた円柱に差す日の光

**Sightless, unless**

The eyes reappear  
As the perpetual star  
Multifoliate rose  
Of death's twilight kingdom  
The hope only  
Of empty men. (61-67)

目に見えない、もし  
死の薄明かりの王国の  
永遠の星  
八重のバラとして  
目が再び現れなければ

22 行の「そこでは」(“There”)は、死の様相の人間社会を表していた 20 行の「死の夢の王国」(“death's dream kingdom”)を指す。「壊れた円柱」(“a broken column”)は、人間社会の街や建物などが荒廃した状況を思わせる。そうした場所に日の光が注ぐ光景がわれわれに連想させるのは、エリオットの四つの詩から構成される『四つの四重奏』(*Four Quartets*, 1943)の最初の詩「バーント・ノートン」(“Burnt Norton”, 1935)の「池は乾き、コンクリートは乾き、縁は褐色、/すると池は日の光の水で満たされ、/・・・/水面は光の芯から輝いて現れた」(“Dry the pool, dry concrete, brown edged, / And the pool was filled with water out of sunlight, /... / The surface glittered out of heart of light” (34-35, 37)である。彼は、何度かイギリス南西部のグロスターシャー (Gloucestershire)にある古い荘園のバーント・ノートンを訪問している。そこで彼が見たときの印象は、干上がった水たまりの跡に日の光が差して、まるで水面がきらきら輝いているかのようなようであった。これら 3 行の内容は、我を忘れて無上の喜びを味わった彼の体験を踏まえている。

このような体験と似た忘我の瞬間が、上の 22-23 行に含蓄されているであろう。1925 年の詩の語り手は、脳裏に焼き付いて離れない「目」を凝視する。その前提条件が 62-65 行である。この詩行は、中世イタリアの詩人ダンテ・アリギェリ (Dante Alighieri, 1265-1321)の『神曲』(*Divine Comedy*)の影響を受けている。マンジュ・ジェイン (Manju Jain)によれば (208)、ダンテの場合、バラや生気のある星は聖母マリアとして描かれ(『天国編』第 23 歌)、「八重のバラ」(“Multifoliate rose”)は永遠の白いバラで、この聖母が祝福された人々のいる花びらの中心に座している (同第 31 歌)。浄罪界で理想の女性のベアトリーチェ (Beatrice) と再会したとき、ダンテは美しい彼女の姿に心を打たれて、過去の罪を改悔する(『煉獄編』第 30 歌)。ベアトリーチェは、彼が天国のヴィジョンを直視するための導き手となっている。エリオットの詩に描かれた「目」は、ベアトリーチェのように語り手を道案内し、聖母マリアのように彼を救ってくれる理想の女性を象徴する。

そこで二つ「目」(22行、62行)は、至福を直観したダンテに見られるような目であり、「一途な目」、つまり死後に天国へ行った聖者たちに認められるような目でもある。語り手が彼らの行為を通して指摘しようとしていることは、至福を感じるような世界の存在である。

これまでの語り手は、空しい現実の世界と至福の世界をわれわれに話してきた。それは、われわれがこれら二つの世界を認識するためである。

「うつろな人々」の終わりは、次のような描写で締めくくっている。

*This is the way the world ends*

*This is the way the world ends*

*This is the way the world ends*

*Not with a bang but a whimper. (95-98)*

これがこの世の終わり方である

これがこの世の終わり方である

これがこの世の終わり方である

バートではなく、めそめそと。

これは、花火が打ち上げられて、ガイの人形が燃え尽きる光景を思わせる。この光景はわれわれに、人間社会の空しい現実を強く印象づけている。特に最終行は、ガイの人形が弱々しく燃え尽きる様子を通して、そうした現実の虚無感を伝えている。毎年行われるガイ・フォークス祭を考えると、われわれは95-98行からガイの人形の哀愁と自虐を感じて、人間社会の空しい現実の繰り返しを思い知らされる。そこには、人生の虚無感を伴う円環のイメージが、毎年行われるこの行事に呼応して見出されよう。「うつろな人々」は、人々の醜い現実世界と、それとは別の無上の世界を描き出している。ただし、後者の世界の実現は、前者の世界の虚無感が強いのに反して、空しく響くだけである。その響きの奥には、脱円環を志向する、はかないイメージが感じられよう。

## 2. 1927年以降の詩

1927年、エリオットは中庸を掲げる英国国教会<sup>4</sup>に入信する。翌年、彼はこの宗教について、英国国教会の中道主義がエリザベス女王の統治下における適材適所の精神を表していると考えて、この中道主義を高く評価している(“Lancelot Andrews” 14)。中道主義を信仰の土台とする英国国教会への入信は「うつろな人々」が最後の詩であると考えた彼(“To Marianne Moore,” 31 Jan. 1934; Lehmann 5)に、詩作の再開をもたらす機会を与える。アメリカの批評家・古典学者ポール・エルマー・モア(Paul Elmer More, 1865-1933)宛の1928年懺悔火曜日付の手紙<sup>5</sup>の中で、彼はキリスト教が人生を満足させると書いている。その手紙の内容が裏づけるように、人生に活路を見出す彼は詩作活動を再始動する。彼は、フ

エイバー・アンド・ガイヤー (Faber and Gwyer) 社から、「エアリアル」詩集 ('Ariel' poems) の企画のためにクリスマス用の詩を書いてほしいと依頼される。その依頼を受け、彼が脱稿したのは、「東方の三博士の旅」 ("Journey of the Magi", 1927)、「シメオンの歌」 ("A Song for Simeon", 1927)、「小さな魂」 ("Animula", 1929) である。これらの詩の執筆がきっかけとなって、『聖灰水曜日』 (*Ash-Wednesday*, 1930) が生まれ、同じ頃「マリーナ」 ("Marina", 1930) がこの詩集の 1 編として発表される (Lehmann 5)。

ここで、最初の 3 編の詩を取り上げて、改宗後のエリオットの詩を考察する。1927 年 9 月に発表の「東方の三博士の旅」は、「マタイによる福音書」第 2 章 1-12 節を題材にして、三博士のうち一人が幼子イエスの誕生を祝う旅をする。この旅を踏まえて、語り手は幼子が生まれた場所について次のように追憶する。

... ; this Birth was  
Hard and bitter agony for us, like Death, our death. (38-39)

イエスの誕生は  
彼の受難やわれわれの肉体的死のように、われわれにとって激しく苦い痛みであった。

イエスの誕生は語り手に、後の彼の受難やわれわれ人間の肉体的死のように、すでに激しい苦痛を印象づけたという。語り手のつらい長旅は、われわれが精神的再生を目指すための苦難の旅を物語る。幼子の生誕についての描写は、われわれの精神的再生への渴望とその不安が交錯した彼の複雑な心境、つまり幼子の誕生を素直に喜べない心境を示唆するであろう。

3 か月後、後に『聖灰水曜日』第二部となる詩「挨拶」 ("Salutation") が発表される。ここでは、次のような詩行に注意を払いたい。

Lady of silences  
Calm and distressed  
Torn and most whole  
Rose of memory  
Rose of forgetfulness  
Exhausted and life-giving  
Worried reposeful  
.....  
Grace to the Mother  
For the Garden  
Where all love ends. (25-31, 45-47)

沈黙の聖女  
 穏やかにして悲しみ  
 引き裂かれながらこの上なく完全な  
 記憶のバラ  
 忘却のバラ  
 身を粉にして命を与え  
 心配しながら心安らか  
 .....  
 聖母に恵みあれ  
 すべての愛が終わる  
 園のために。

この詩は、『新生』(Vita nuova) 第3章でベアトリーチェがダンテに会釈をした場面を踏襲している。同章では、彼女が挨拶すると、ダンテは恩寵を感じる(6-7)。この場面が、静寂に包まれた沈黙の聖女の素材となっている。「悲しみ」(“distressed”)、「引き裂かれ」(“Torn”)、「身を粉にして」(“Exhausted”)、「心配して」(“Worried”)は、われわれ人間の罪深さが彼女に与える苦痛を示唆している。「穏やか」(“Calm”)、「この上なく完全な」(“most whole”)、「命を与え」(“life-giving”)、「心安らか」(“reposeful”)は、そうした罪深さを受容する彼女の包容力の広さを示唆している。われわれは彼女を記憶する時もあれば忘れる時もある。このようなわれわれの自分本位が、愛の象徴であるバラ(“Rose”)についての「記憶」(“memory”)や「忘却」(“forgetfulness”)に含蓄されているであろう。また、「聖女」(“Lady”)が「聖母」(“the Mother”)に言い換えられている。「聖女」に触れた詩行がダンテと関わっていることを考慮すると、「園」(“the Garden”)は、『天国編』第31歌における天上界の庭(世俗界への愛着が断ち切られた所)を思い起こさせる。そこで45-47行は、ベアトリーチェや聖母マリアのような聖女への祈りを表現している。この表現は聖女に、神へ魂の救済のとりなしを祈願したものである。

1928年9月に公表された「シメオンの歌」は、「ルカによる福音書」第2章25-35節を題材にして、エルサレムの信仰家シメオンの心境を次のように紹介する。

**I am tired with own life and the lives of those after me,  
 I am dying in my own death and the deaths of those after me.  
 Let thy servant depart,  
 Having seen thy salvation. (34-37)**

私は自分自身の生や私の後から来る人たちの生に疲れています、  
 私は自分自身の死や私の後から来る人たちの死を思い死のうとしています。

あなたの僕<sup>しもべ</sup>を去らせてください、  
あなたの救いを見ましたので。

これらの詩行は、信仰心の厚い老齢のシメオンが死を待つ心構えを伝える。語り手は、彼の個人的な問題が後世の人々の信仰の問題にも深く関係することを示唆する。その示唆はわれわれに、精神的再生の覚醒を暗に促す表現となっていることを看過すべきではないであろう。翌年9月、「小さな魂」が発表される。そこでは、次のような詩行が見られる。

The heavy burden of the growing soul  
Perplexes and offends more, day by day;  
Week by week, offends and perplexes more  
With the imperatives of 'is and seems'  
And may and may not, desire and control.  
.....  
Pray for us now and at the hour of our birth. (16-20, 37)

成長する魂の重荷のため  
日毎に、ますます心を悩まし気分を害する、  
週毎に、ますます気分を害し心を悩まし  
「あるものと、あると思われる」とか  
かもしれないと、そうでないかもしれない、欲望とその抑制という命令で。  
.....  
われわれのために、今、われわれの誕生の時、祈り給え。

「小さな魂」を発表した当時、エリオットは『ダンテ』(Dante, 1929)を執筆していた。このダンテ論では、「煉獄編」第16歌の原文と彼自身の英訳が引用され、子供の無垢な成長の姿が紹介される。1929年の詩の表題は、その引用に見られる“*Tanima simplicetta*”[“the simple soul”](45; 括弧内はエリオットの英訳)に由来する。このような子供の成長の姿に比べて、16-20行は生まれた後の子供が苦悩する姿を描いている。そこには、どこか暗い心の中のイメージがうかがわれる。このイメージは、育てられた家庭などに迷惑をかけた罪悪感が含蓄されているであろう。37行は、ローマ・カトリック教会での祈祷文「われわれのために、今、われわれの死の時、祈り給え」(“Pray for us now and at the hour of our birth”)の「われわれの死」(“our death”)が「われわれの誕生」(“our birth”)に変更されている。それは、われわれ人間が新たに生まれてくる子供の幸せを聖母マリアに祈る表現を示唆する。

このような論考から判断して、三つの詩—「東方の三博士の旅」、「シメオンの歌」、「小さな魂」—は共通して、心静かな信仰の必要性を伝えようとしている。それは同時に、エリオ

ットが詩作の再始動の原動力となっているのである。

### 3. 1930年の二つの詩

1930年4月、『聖灰水曜日』が刊行される。この詩は六部から構成されている。第一部の冒頭の3行は、「私は再び振り返ることを願わないので / 私は願わないので / 私は振り返ることを願わないので」(“Because I do not hope to turn again / Because I do not hope / Because I do not hope to turn”)と書かれている。これら3行は、主人公の語り手が現世の様々な欲望を放棄しようとする意思表示を表現する。同部は、このような彼の意思表示が基調となり、ローマ・カトリック教会の祈祷文である「われわれのために、今、われわれの死の時、祈り給え / われわれ罪人のために、今、われわれの死の時、祈り給え」(“Pray for us sinners now and at the hour of our death / Pray for us sinners and at the hour of our death.” 40-41)で終わる。この最後の祈祷文は聖母マリアに、罪深い人間の救済に助けの手を差し伸ばしてしてくれるようお願いする内容である。それは、われわれの肉体的死が永遠の生命となるように願うと共に、現世のわれわれの精神的再生も希求することを意味する。

第二部は、前部で感じられた聖母マリアの存在を契機に、神へのとりなしを期待される聖女を紹介する。66行の「沈黙の聖女」(“Lady of silences”)から72行の「心配しながら心安らか」(“Worried reposeful”)までの詩行は、母体となる「挨拶」の25-31行に相当する。この詩を読んだ人であれ、「うつろな人々」を読んだ人であれ、この聖女は、ベアトリーチェのように正しい道へと導き、聖母マリアのように救いを差し出す聖女であることに気づくであろう。同部の66行-72行は、世俗的な人間愛が断ち切られた園にいる聖女の恵みが罪深さを悔いて、新たな人生を目指すわれわれ人間に注がれるように願う語り手の祈りを表す。

第三部の母体となる詩の原題は「階段の最上段」(“Som del’ Escalina”)である。この原題は、ダンテが著した『神曲』「煉獄編」第26歌147行で、12世紀後半に活躍した吟遊詩人アルナウト(Arnaut)が発した言葉から採用されている。「煉獄編」第26歌147-48行は、現行の「J. アルフレッド・ブルーフロックの恋歌」(“The Love Song of J. Alfred Prufrock”, 1910-11)の草稿に付けられたエピグラフである(“The Love Song of J. Alfred Prufrock (Prufrock among the Women)” 39)。このエピグラフについてのエリオットの解説によれば、この罪人は、浄罪のため、自ら進んで至福の状態に置かれる準備しているという(Dante 40)。第三部は、浄罪の準備をするアルナウトを参考にしている。同部の書き出しは次の通りである。

At the first turning of the second stair  
I turned and saw below  
The same shape twisted on the banister  
Under the vapour in the fetid air  
Struggling with the devil of the stairs who wears

The deceitful face of hope and despair. (96-101)

第二階段の最初の曲がり角で  
私は振り向いて、下を見た  
同じ姿が手すりにからみついて  
悪臭の漂う空気の中で、もやに包まれ  
人を欺く希望と絶望の顔をした  
階段の悪魔と争っていた。

場面は第二階段の第一の曲がり角である。語り手は、振り返って下を眺めると、自分と同じ顔をした者が闘っているのに気づく。その相手は、現世で人を欺いて希望や絶望を与える階段の悪魔である。彼は現世で内面葛藤していたことを見つめている。

語り手は、第二階段の第二の曲がり角に来ると、真っ暗で何も見えない一種の絶望の試練を受け、続いて第三階段の第一の曲がり角に来ると、「希望と絶望を越えた力」(“*strength beyond hope and despair*” 115)を感じる。

第三部は次のような詩行で終わる。

Lord, I am not worthy  
Lord, I am not worthy  
but speak the word only. (117-19)

主よ、私はとるに足りない者です  
主よ、私はとるに足りない者です。  
ただ、お言葉をください。

117-18行は、「マタイによる福音書」第8章8節の「主よ、わたしの屋根の下にあなたをお入れする資格は、わたしにはございません。ただ、お言葉を下さい。そうすれば僕はなおります」<sup>6</sup> (“*Lord, I am not worthy that thou shouldst come under my roof, but speak the word only, and servant shall be healed.*” qtd. in Southam 229) から採用され、司祭が聖体拝領をする前に唱える言葉である。この言葉は、謙虚な姿勢でイエス・キリストの恩恵に感謝して返事したものである。その謙虚な彼の返事が119行の祈りの表現に生かされている。

第三部の語り手は、現世への執着から離れて、神の御心を受け入れるだけの魂の浄化にまだ達していないが、百卒長のような謙讓が身につくように祈っている。

1930年に『聖灰水曜日』が刊行される際、この詩の後半(第四部~第六部)がまとめて書き加えられている。第四部は、語り手がまだ階段を登っている最中の場面である。その途中で彼は次のように感じる。

**The new years walk, restoring  
Through a bright cloud of tears, the years, restoring  
With a new verse the ancient rhyme. Redeem  
The time. Redeem  
The unread vision in the higher dream (135-39)**

新しい年月が歩き、  
輝く涙の雲をとおして、歳月を取り戻し、  
新しい詩で、昔の韻律を取り戻す。  
時をあがなえ。  
高次の夢に現われた読まれないヴィジョンをあがなえ。

彼が思い浮かべるのは、改悛でもって始まる新しい年月のことである。この喜びの涙で目がかすんでいるが、彼は今まで過ごした歳月を悔い改めようとする。この詩の表題『聖灰水曜日』は、キリスト教において懺悔の象徴として回心者の頭に灰をふりかける四旬節（Lent）の初日を意味する。エリオットは、詩人としての使命感を心新たに抱き、この伝統的な宗教の儀式を踏まえて詩作を試みている。そうした試みが、「新しい詩で、昔の韻律を取り戻す。/ 時をあがなえ」に反映されている。彼がその詩作を通して目指すのはわれわれに、人間社会で軽視されている信仰の大切さを再認識させることである。そうした再認識の必要性が「高次の夢に現われた読まれないヴィジョンをあがなえ」に暗示されている。

第五部の書き出しは、語り手が苦難の浄罪の道から気づいたことを次のように描いている。

**If the lost word is lost, if the spent word is spent  
If the unheard, unspoken  
Word is unspoken unheard;  
Still is the unspoken word, the Word unheard,  
The Word without a word, the Word within  
The world and for the world;  
And the light shone in darkness and  
Against the Word the unstilled world still whirled  
About the centre of the silent Word. (149-157)**

失われた言葉が失われ、使い果たされた言葉が使い果たされ  
聞かれない、話されない  
言葉が話されず聞かれないとしても、

なお話されない言葉、聞かれない御言葉  
言葉のない御言葉、この世のうちにある  
この世のための御言葉がある。  
光は暗闇に輝いたが、  
御言葉に逆らって、静かでないこの世はなおも渦巻いた  
静かな御言葉を中心に。

149、152、153 行の “word” は人間の言葉であり、151、152、153、156 行の “Word” は三位一体（神、聖霊、キリスト）としてのロゴスである。人間の言葉が失われたり使い果たされても、また、ロゴスも人々から聞かれなかったり語られなかったりしても、それでも普遍的に確かなものがある。それは、人間の言葉で語られないし、人間に聞かれないロゴスである。ロゴスはこの世とつながり、この世のために在る。ロゴスが宗教を軽視するこの世を導くという。しかし、日々移り変わるこの世は、動じないロゴスを中心にいつも旋回している。人間の言葉やロゴスのあり方を自問自答する語り手の描写には、詩作の再出発と信仰の復活が交差したエリオットの思いが込められている。

第六部では、浄罪のための階段を登った後、語り手は、心の喜びを様々な対象（聖女、聖母、救世主、泉の精、庭の精、川の精、海の精）に呼びかける。同部は、次のような彼の浄罪の祈りで締めくくっている。

**Suffer me not to be separated**

**And let my cry come unto Thee. (218-19)**

私から離れないでください

そして私の叫びを神の許に届けてください。

彼は神に、せめて自分が味わった心の喜びだけでも消えないように祈っている。同じことが、聖母マリア信仰に依拠して、聖女への祈りでもある。そのため219行は、自分の浄罪を神へとりなしてくれるように必死になって祈る表現となっている。それには同時に、詩人としてのエリオットの再出発を導いてくれようとして聖女へ祈願した彼の表現ともなっている。

『聖灰水曜日』から5か月後、「マリーナ」が発表される。ここでは、次のような場面を見てみたい。

**This form, this face, this life**

**Living to live in a world of time beyond me; let me**

### Resign my life for this life, (29-31)

私を超えた時の世界で生きるために生きる  
この姿、この顔、この命。  
この命のために私の命を諦めよう、

この詩の表題は、ウィリアム・シェイクスピアの (William Shakespeare, 1564–1616) の『ペリクリーズ』 (*Pericles, Prince of Tyre*) で、タイヤの領主ペリクリーズの娘として登場するマリーナである。この劇の 5 幕 1 場で、船旅をしていた老齢のペリクリーズは死んだと思い込んでいた娘と再会する。エリオットにとって「マリーナ」の主題は、領主の再会である (“To E. MaKnight Kauffer,” 24 July 1930; qtd. in Schulman 211)。彼はまた、評論「ジョン・フォード」 (“John Ford”, 1932) の中で、領主が娘と再会することに注目している (171)。

このように、エリオットは父娘の再会に魅了する。この魅了が上の詩行の表現に反映されている。語り手のペリクリーズは、生きていた娘の姿が「この姿、この顔、この命」 (“This form, this face, this life”) として描かれ、彼女の世界が「私を超えた時の世界」 (“a world of time beyond me”) として描かれている。行方不明となっていた娘を発見したとき、彼は現世への執着を諦めさせるほどの無上の歓びに酔いしれている。「マリーナ」をクリスマス用として書いたとき、エリオットはこの詩にうかがわれるペリクリーズの精神的再生の姿をわれわれに伝えようとしている。

1930 年の二つの詩は、1927–29 年の詩で希求された信仰の喜びをさらに追及している。そこでは、現世の退廃が繰り返される円環の世界から抜け出して、脱円環を志向するイメージが強く表現している。それは、この時期におけるエリオットの新しい詩作の主調となることを意味するのである。

### おわりに

1933 年、T. S. エリオットは『詩の効用と批評の効用』の中で、「詩人にとって本質的な利点は扱う美しい世界を抱くことではありません。美と醜さの両方の底を見据えて、倦怠、恐怖、栄光を見ることです」 (“the essential advantage for a poet is not, to have a beautiful world with which to deal: it is to be able to see beneath both beauty and ugliness; to see the boredom, and the horror, and the glory.” 106) と述べている。詩人としてのエリオットにとって、詩の本質的なものではない美しい世界を描くことではなく、美と醜さの両方を視野に入れて、倦怠と恐怖と栄光を考えることである。彼はまた、1920 年の評論「精神的指導者としてのダンテ」 (“Dante as a ‘Spiritual Leader’”) の中で、「芸術家によって、恐ろしいもの、汚いもの、嫌悪感を催させるものを思いめぐらすことは、美を追求する衝動の必要で消極的な面である」 (“The contemplation of the horrid or sordid or disgusting, by an artist, is the necessary and negative aspect of the impulse toward the pursuit of beauty.” 447) と述べ

ている。彼の場合、「恐ろしいもの、汚いもの、嫌悪感を催させるもの」に注目した描写が、初期の主要な詩の特徴である円環のイメージを与える。それは、われわれ読者に美しさを抱かせるための逆説的な手法によるものである。

こうした手法が 1933 年の著書に表現された内容に反映されている。エリオットの中期の詩が希求していたのは、倦怠と恐怖の世界にうかがわれる円環のイメージから脱して浄罪の道（栄光の世界）を目指すことである。それが、脱円環を志向するイメージを印象づける中期の詩の特徴となっていると言えよう。

#### 注

1. この点については、拙著『T. S. エリオットの詩の研究—円環のイメージから脱円環のイメージへ—』を参照。
2. エピグラフの数字はエリオットの『T. S. エリオットの詩・劇全集』（*The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot*）の頁数を表す。
3. エリオットの詩からの引用はすべて『T. S. エリオットの詩・劇全集』による。括弧内の数字は詩の行数を表す。
4. 英国国教会については、次のような解説を参照。

「英国教会、英国聖公会とも言う。……第 7 代カンタベリー大主教シオドア（在位 668—690）は教区制を整備し、教会会議なども積極的に展開する中で英国教会を体系化し、以降、英国教会は英国という国家統一と連動しつつ大きく発展し、国教会として定着することとなる。

英国教会がローマ教皇の指導権から独立し、自立した国民教会となるのは 16 世紀のことである。国王ヘンリー 8 世の結婚無効宣言がきっかけとなって英国宗教改革は開始されたが、その背景にはウィクリフやロザード派らの改革運動や大陸のカルヴィニズムを中心とする宗教改革の影響がある。続くエドワード 6 世の時代に、カンタベリー大主教克蘭マーによる礼拝、制度の大胆な改革が次々に実行され、中でも祈禱書（*The Book of Common Prayer*）の制定は英国教会に独自性を与えた。1558 年にエリザベス 1 世が即位し、英国の宗教改革は完成期を迎える。エリザベスの宗教解決により、英国教会は極端なローマ主義もプロテスタント主義も採らない〈ヴィア・メディア〉（中庸）の方向性を確立していく。」（『岩波キリスト教辞典』136）

5. この手紙はプリンストン大学図書館に所蔵されている。
6. 聖書からの引用は日本聖書協会改訳の『聖書』による。

#### 引用文献

Dante Alighieri. *Vita nuova*. 1992. Trans. Mark Musa. Oxford: Oxford UP, 1999.

- Eliot, T. S. "Durkheim." *Saturday Westminster Gazette* 48.7235 (19 Aug. 1916): 14.
- . "The Beating of a Drum." *Nation and Athenaeum* 34.1 (6 Oct. 1923): 11-12.
- . "Salutation." 1927. *Saturday Review of Literature*. 4.20 (10 Dec. 1927): 429.
- . "Lancelot Andrew." 1928. *For Lancelot Andrews: Essays on Style and Order*. London: Faber and Gwyer, 1929. 13-32.
- . "To Paul Elmer More." Shrove Tuesday 1928. Paul Elmer More Papers. Princeton U Library, Princeton.
- . *Dante*. London: Faber and Faber, 1929.
- . "John Ford." 1932. *Selected Essays*. 1932. London: Faber and Faber, 1951. 193-204.
- . *The Use of Poetry and the Use of Criticism: Studies in the Relation of Criticism to Poetry in England*. 1933. London: Faber and Faber, 1950.
- . *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot*. London: Faber and Faber, 1969.
- . "The Love of J. Alfred Prufrock (Prufrock among the Women)." *Inventions of the March Hare: Poems 1909-1917*. Ed. Christopher Ricks. London: Faber and Faber, 1996. 39-41.
- Jain, Manju. *A Critical Reading of the Selected Poems of T. S. Eliot*. Delhi: Oxford UP, 1991.
- Lehman, John. "T. S. Eliot Talks About Himself and the Drive to Create." *New York Times Book Review* 58.48 (29 Nov. 1953): 5, 44.
- Schulman, Grace. "Notes on the Theme of 'Marina' by T. S. Eliot." *T. S. Eliot: Essays from 'The Southern Review'*. Ed. James Olney. Oxford: Clarendon P, 1988. 205-11.
- Shakespeare, William. *Pericles, Prince of Tyre*. *The Complete Works of Shakespeare*. 1905. Ed. W. J. Craig. London: Oxford UP, 1974. 1048-72.
- Southam, B. S. *A Student's Guide to Selected Poems of T. S. Eliot*. 1968. London: Faber and Faber, 1994.
- 大貫隆・名取四郎・宮本久雄・百瀬文晃編。『岩波キリスト教辞典』。東京：岩波書店，2002。
- 古賀元章。『T. S. エリオットの詩の研究—円環のイメージから脱円環のイメージへ—』。北九州：大学出版，2004。
- 『聖書』。新約聖書。1954。旧約聖書。1955。日本聖書協会改訳。東京：日本聖書協会，1969。